

1

運命

拾
って

商売

横笛

寒
い

薬局

2

停電

リ
ハ
ー
サル

ア

(3 完 答)

イ

エ

ア

ウ

(記述題)

し

げ

ま

ウ

お
じ

一
軒

(7 B 完 答)

3

見
態

イ

ウ

エ

ア

(1 完 答)

(2 完 答)

(4 完 答)

よ

東
西

イ

と

エ

ウ

ア

(5 順不同)

(6 ② 完 答)

ウ

オ

ど

の
時

て
い
る

(6 ③ 完 答)

見
た
目

い
文
化

1

2

2

空実が にわかには信じがたい話をまじめに語った

ので、自分も 電柱をのぼっていた理由を、信じても

られなくても話す

しかないとおきらめたから。

(同意可)

配 点

1・2 5・3 3

各 2 点 × 1 3 = 2 6 点

2 4

6 点

その他

各 4 点 × 1 7 = 6 8 点

〈計〉 1 0 0 点

1

- 1 「運」の「しんによう」を続け字にしないように。「命」の三画目の「一」が短くなりすぎないように。
- 2 「拾（ひろう）」は「捨（すてる）」と間違えやすいので気をつけよう。
- 3 「商」のなかを「古」にしないように。「売」は最後の二画がつかないように。
- 4 「横」の「笛」ともに「由」を書く部分がある。上を確実に突き出すこと。
- 5 「寒」のまんなかを「其」のような形にしないように。最後の二画の点の向きにも気をつけよう。
- 6 「葉」はくさかんむりをわすれないように。九十二画目を続け字にしないように。「局」は字形を正確に覚えよう。

2

- 1 「停電」にしか気づけていないのでは本文の理解として不完全である。「リハーサル」とは予行演習のこと。実際に停電にするのは三日後である。
- 2 1はクールな印象をもたれている七湖が電柱をのぼっているところを見られたときの気持ちなのでウ。2は七湖が空実の細い体をながめていることからイ。3は本文前半でお店のおじさんが目をそらす場面から罪悪感を読みとっておきたい。エである。
- 3 波線部のことばも選択肢のことばも、すべて心情表現になっている。心情読解にはことばの知識も必要不可欠である。
- 4 流れをしっかりとふまえよう。「……なんで？」理由があるにちがいない。↓「どうせ、信じてもらえない」そこで、空実はちよつと考えて、「じゃあわたしも、信じてもらえないかもしれない話をする。…」↓七湖は小さくため息をついて、「わかった。ねえ、…」という流れである。
- 5 A「しびしび」気が進まないまま、しかたなく物事をするさま。2「しげしげ」物をよくよく見るさま。3「まじまじ」目を離さないで一心に見つめるさま。
- 6 流れをしっかりとふまえよう。「どうしてそんなに協力してくれるの？」↓「それはまあ……わたしもちっちゃい時、ハムスターがかったからね」いっしょに過ごしたのはたつた二年七か月だったけれど、大好きな友だちだったから。という流れである。アは「二年七か月もいっしょに過ごした」が不適。イは「自分にとって全ての動物が友だちのように大切な存在」が不適。エは「家族」についての内容になっているため不適。空実にとってハムスターは友だちであった。
- 7 六町内が真っ暗になったのはマジシャンのおじさんの献身的な努力によって、夜空が真っ暗になったのは羽年が眠そうな顔で不思議な力を使ったことによってであった。実はおじさんよりも息子の羽年のほうが魔法のような力を持っていたのである。
- 8 ア「お店の人に信じてもらえないかもしれない」とあるが、本文前半で「わたしが食べるとこ、お店の人しか見てなかったし。今でもフードコートに行くと、お店のおじさんは目をそらす」とあるのだから、お店の人は空実が回転まんじゅうを百五十三個食べたことを知っているのである。

3

- 1 直後に「装いは、広義には…と定義されます」とあるが、ここでは「★よりあと」という指定に合わない。続きに「つまり…」とあり、その段落の終わりに「とにかく、…を『装い』といいます」とあり、ここが答えになる。
- 2 I「多様なものを含み」と「多様な意味を持つて」が並べられている。II「見た目を変化させるためのあらゆること」に対して「化粧品を体に塗ることによる化粧」などは具体例である。III「現在見つかったものもとも古い装いの痕跡は…」と、ここまでの流れからやや脱線した内容が続いている。IV「なにかをまどうといった装いは、もつと古くからおこなわれていた可能性があります」↓（ということはいっからおこなわれていたのが説明されることが期待されるが）↓「そういう装いは痕跡が見つかからない（残らない）ため、どのくらい昔からおこなわれていたかは、今のところ謎となっています」という流れ。
- 3 W「および」ならびに。また。そして。X「古今東西」昔から今までと、四方のすべて。いつでもどこでも。Y「タイプ」形。型式。Z「まどう」身につける。着る。
- 4 Aが含まれるグループは全て形として残らないものであるからエ「しぐさ」が入る。Cは「ピアスや、美容整形や…」などは、身体変工に含まれます」から決まる。Bは身体装飾ではあるが身体変工ではないウ「服装」になる。イ「おしゃれ」は本文中で「『はじめに』で、時代によっておしゃれは異なるという話をしましたが、…」の「一か所にしか登場せず、他の概念との関係は本文の範囲からは不明である。しかしその直後で『装い』や『装うこと』そのものには、…普遍性があります」とあるので、「装い」に近いやや広い概念なのであろうという推測はできる。いずれにせよ「ピアス」「服装」などの具体的な装いの種類と同列のものではないことはわかる。
- 5 本文2～3行目にある「装い」の定義から、ア・イは適切であることがわかる。また図に「しぐさ」や「姿勢」も含まれることから、「言葉づかい」のような、形としては残らないがその人が他者に与える印象を変えるものもまた装いの一種であると考えられるため、エも適切である。ウ・オはいずれも他者からの見え方に関することではない。
- 6 ②「まず、時間を超えた普遍性から考えてみましょう…これが時間を超えた普遍性があるということです」が目印となる。③「次に、文化を超えた普遍性です…それが、文化を超えた普遍性があるということです」が目印となる。
- 7 ア「装い」と「身体装飾」がほぼ同義で、「身体変工」は身体装飾の一部であることが図からわかるため、「装い」とより意味が近いのは「身体装飾」である。イ「7万5千年前」というのは「現在見つかったものもとも古い装いの痕跡」であって、「もつと古くからおこなわれていた可能性」があるのであった。